(1) 特筆すべき教育活動の取組と成果（大学教育改革の支援プログラム（ＧＰ等）の採択状況と取組、グローバルＣＯＥ等の大型プロジェクトの採択・実施状況などを含む。）

（１）　教育活動の国際化を推進する目的で、平成 22 年度研究科長裁量経費による共同研究プロジェクトとして、北京大学外国語学院と共同で「国際的な視野に立った日本語・日本研究共同教育プログラム」を平成 23 年 1 月に実施した。このプロジェクトでは、北京大学より教員２名、大学院生 3 名を東北大学に招聘し、本研究科の修士論文発表会への参加、教員・大学院生との共同ワークショップ等を行った。成果としては、北京大学との共同教育プログラム構築へ向けての合意が形成された。

（２）　国内外の学会発表や学術誌への論文投稿に必要な外国語（外国人留学生にとっての外国語である日本語を含む）の運用能力を高めるため、平成 18 年より演習形式の授業科目「研究のための英語スキル」及び「研究のための日本語スキル」を共通科目として開設している。受講生の授業評価では大いに有益であったという高い評価が寄せられている。また、本研究科の学位授与促進プログラムに基づく各種発表会において、学生一人ひとりの発表に対し詳細な助言指導を行うコメンテーター教員を配置している。これらと各講座の演習授業を有機的に関連させることによって各学生の研究発表・論文作成能力の向上に鋭意取り組んでおり、平成 22 年度の学会発表と学術誌への論文掲載は、後期課程学生の学会発表 29 件（6 件）、論文掲載 33 件（8 件）、前期課程学生の学会発表 2 件（0 件）、論文掲載 3 件（1 件）であった（かっこ内は国際学会での発表と外国語による論文掲載の件数で内数である）。

(2) 特筆すべき研究・診療活動の取組と成果

本研究科では人文・社会科学、自然科学及び言語科学の諸分野において伝統的な概念や方法論の枠組みを超えた総合的・学際的な研究を展開しているが、特に附属言語脳認知総合科学研究センターは、本研究科の言語科学分野の研究者が先端的な研究を推進している。平成 22 年度の特筆すべき研究活動の成果としては、海外出版社からの著書出版として、Bernd Heine & Heiko Narrog（共編著）*The Oxford Handbook of Linguistic Analysis.*[Oxford University Press (2010)] 、および Tetsuji Oda & Hiroyuki Eto（共編著）*Multiple Perspectives on English Philology and History of Linguistics*. [Peter Lang International Academic Publishers (2010)]の２件があった。また、国際的な水準の学術ジャーナルに掲載された論文として、Takeshi Nakamoto（単著）,“Inalienable possession constructions in French.” [*Lingua*, 120(1), (2010), 74-102]と、Serkan Şener and Daiko Takahashi（共著）,“Argument Ellipsis in Japanese and Turkish.” [*MIT Working Papers in Linguistics* 61: *Proceedings of the 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, (2010), 325-339]の２件があった。

(3) 特筆すべき社会貢献、国際化等の活動の取組と成果

本研究科は研究成果を社会に還元するため、毎年公開講座を実施してきた。平成22年度は「装いの文化史　－変化する同一性－」を共通テーマに３人の研究科所属教員が各々３時間にわたって日頃の研究成果を一般市民向けに講演した。また最終日にはラウンドテーブルを設け、３人の講師が参加者からの質問に応答する工夫もしている。

また社会に向けた研究情報の発信として、本研究科は東北大学リベラルアーツサロンにも参画している。平成22年度は、本研究科教員が、「自然の制約のもとで「よりよく」暮らそう！」と題する講演を行った（11月12日開催）。

国際交流委員会および言語脳認知総合科学研究センターを中心にして、国際的水準の大学や機関との学術ネットワークの構築を推進している。平成22年度は、東北大学と新たに大学間学術交流協定を締結したチュラロンコーン大学（タイ）と、附属言語脳認知総合科学研究センターに所属する研究者が共同研究プロジェクトを進め、その成果の公表および将来的な共同研究の促進を期してチュラロンコーン大学において国際共同シンポジウムを開催した。

国際的な学術ネットワークを構築するため、言語脳認知総合科学研究センターでは海外から著名な研究者を招いて講演を行っている。平成22年度は、オークランド大学（ニュージーランド）、ピッツバーグ大学（米国）、アリゾナ大学、ハーバード大学（米国）から先端的な研究を行っている研究者を招いて講演と研究会を開催した。

また、同センターは社会貢献・国際化を促進する活動として、平成22年11月に、国内の言語学関係では最大の学会である日本言語学会の大会を共催し、同月、言語と情報処理に関する国際学会である PACLIC（Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation）も共催で開催した。さらに社会貢献活動として、平成22年2月に公開シンポジウム「自己：インド宗教哲学 vs. 脳科学」を開催した。

(4) その他、特筆すべき活動等の取組と成果

なし